

軽快に階段を上る音が、二つ。先に行く背中を追いかけながら、ふう、と体力のなさにため息を吐いた。それから、どうにか踊り場に辿り着いたところで、ねえ、と声変わり前の、それでいて生気のない声が私を振り返る。

なかに、と答える声は息が上がっていた。大丈夫？と聞かれるのが、氣遣われてのことだと気付くのに、いつもたつぷり十秒はかかってしまうのが、どうしようもない私の悪癖だった。そんな、反省ともつかない感慨に浸っていたならば、

「生まれた日のことは、覚えてる？」

と、夢見がちな彼はそう私に問いかけた。また突然、とは思ったけれど、それ以上に、ぎゅう、と胸が締まるのが先だった。うっそりとした笑みを向けられて、貰った言葉をうまく呑み込めなくなつて。それは、息苦しい、というよりは切ない、に似たものだ。

「……覚えているもの？」

はく、と唇が渴くのをごまかすように、重ねて聞き返す。そうして間を繋いで思考を回すのだけれど、疑問も本物ではあつた。普通はどうなの、と聞かなかつたのは、それが彼の機嫌を少しでも損ねないかと思つてしまつたからだけれど。

「さあ、どうかな。僕は、ちつとも」

肩を疎めてそう言う彼は、多分、何を言つたつて眉を寄せたりはしなかつただろう。なんて、そんな信頼を置いている

ことに、少しだけ身体の力を抜いていることに、ふふ、と自分が可笑しく思えて笑つてしまつた。

「じゃあ、私も——」

なんにも、と答えようとして。言葉は喉の奥に張り付いて出てこなくなつた。目頭が勝手に熱を孕んで、嘘つき、と脳の奥から掌で頬を叩かれているような、そんな感覚。

母親の腹から出てきた日のことだなんて、初めて息を吸つた日のことだなんて、ちつとも覚えていないはずだというのに、それなのに。

私の言葉が出るよりも先に、彼は屋上へと続く扉へ手をかけた。ドアノブが捻られて、少し重い鉄の塊が引かれるにつれ、外気が勢いよく飛び込んでくる。

ひゅお、ひゅう、と吹いては過ぎていく秋の風は冷たくて、腹の底が冷やされていくような思い。借り物の——あるいは彼から奪うようにした学ランの前を閉じ、襟を立てたとしても、体温は下がっていくばかりだった。

それでも、泣きそうな熱さはごまかされてくれなくて。

「いつか僕の子どもにも、聞いてみたいんだ」

屋上へと躍り出て、とん、とステップを踏んで。それが、今の僕の夢、と人差し指を立てて密めいた。

:::

「ごちそうさま」もちゃんと言えないの？なんて。そんな優しい言葉は、誰にかけてもらったんだったか。少なくとも、顔も知らない父親ではないし、恋人の家に入り浸ったまま帰ってこない母親でもないはずだ。

「ほら、両の掌を合わせるんだよ」

その人は——彼は、私の手首を肩越しにとつて、ぺちん、と指と指とを合わせさせて。

「命を頂きました、ありがとうございます、ごちそうさまでした」

言えるだろう、言っごらん、と、私にそう促したのだ。

食べ終えた、慣れない味の料理ばかりの食卓を前にして、私は彼の言う通りに言葉を唇にのせていく。私の胃の中に納まっていた、さっきまで目が合っていた魚のことを思い出しながら。どうにも苦くて、奥歯で噛み砕いて飲み下した野菜のことを思い出しながら。いつもレンジで温めているのとは違う、どこか甘みのある白いご飯のことを思い出しながら。

初めて声にのせたその、言葉は。

「……ご馳走、さま、でした」

「はい、よく言えました」

ご飯って美味しいものなんだなあ、なんて。そんな私の、どう言葉にしたら良いかも分からなかった感情に、抛り所さえもくれたのだ。

胃が膨れているのが心地好いと、そう思ったのはきつと生まれて初めてだろう。そもそも、苦しいときえ思うほど、沢山のものを食べるの方が稀だったけれど。いつも、何かを食べるために口を動かすということの方がよほど億劫で、何も食べないままずっといて、どうしても、お腹が痛くなったら何かを流し込む、なんて。そんな食事ばかりだったから。

誰かと一緒に食べる——とはいえ彼と二人きりだったような気がするけれど——ことは、心が温かくなるのか、と。私に、新たな知識をくれた。

そうして、それから。

「ご馳走、だから、ごちそうさま？」

「いや？ 婆ちゃんの作り置きだから、ご馳走じゃあないしね」

「じゃあ、なあに」

無知で蒙昧な私に、彼は、学生服に身を包んだお兄さんは、くつりと唇の端を歪めながら、楽しそうに教えてくれた。君、幾つ？と嫌味のように聞いてきたのに、馬鹿正直に片手の指を立てて答えた私へと、ふは、と嘔き出したのは今思えば随分な嗜虐趣味だったように思うけれど。

「作ってくれてありがとうございます、って意味だよ」

「ありが、とう……」

「うん。偉いね、君は」

彼と一緒に食器を流しへと運べば、はい、とスポンジが手渡された。これで洗うんだよ、と言われて、食器を片手に固まったのを覚えている。そうか、陶器のお皿は捨てちゃいけないのか、と。思えば急に、重たいそれが何だか宝物のように見えた。

落として割ってしまったように、慎重に。泡だらけにした食器を蛇口の水ですすいでいけば、自分の分を洗い終えた彼は、伸ばしっぱなしだった私の髪を乱雑に撫でつけて、

「ねえ、君、姉さんには似てくれるなよ」

と、そう、囁いた。柔らかい濃茶の髪の下、眼鏡のレンズの向こうに不思議と泣きそうな瞳が私を見つめている。さつきまで、意地悪な色をたたえていたのとは違う。どうにも、私を心配してくれているような、憐れんでくれているような。

ああ、優しい人だ、と名前も知らない彼のことを、私はきつと一生忘れないだろう、と思っただけだったのだ。

だって、私に与えられたその優しさは、致死量ぐらいに甘くて、幸福で。人の善性なんてものを知りさえしなかった私の胸に、適量を越えて流し込まれたものだったから。溺れそうではち切れそうで。だから、きつと、機嫌さえ損ねればこの人だって他の人と変わらないだろう、と確かめたくなったのだ。

「……お父さんに似てる、ん、だって」

だから、きつと、大丈夫。

なんて、普段、人の表情を、機嫌を、思いを、その時々に見える両方不正解の理不尽な選択肢を。伺って、量って、いい方に、と選んでいる舵取りをあえて逆向きに。

「……なら、君は、ぼくに似ればいいよ」

これで不機嫌になるだろうか。殴り飛ばされるなら頼りかは頭の方が少しだけ楽なのだけれど。と、そう考えていた私を置き去りに、ふ、と彼は笑った。

「今日で、ありがとうが、言えるようになったらう」

ぼくにそっくりだ、なんて、やたらと楽しそうに笑うから。普通の人は、ちゃんとと言える言葉なんでしょう、とは、私は聞けやしなかったのだ。

:::

「ねえ、君、大丈夫」

道の端っこ、垣根の間。誰の邪魔にもならない場所で、蹲っていた私にかけられたのは、少し潜めた、低い声。お人好し、とは頭の中では思ったけれど、ありがとう、大丈夫です、と体育座りの膝から額を上げないまま言葉だけはきちんと返す。

「お腹が痛いの、それとも、熱がある？」

季節は冬——それも雪が降りそうなほど、しん、と張り詰

めた日のことだった。空は分厚い鼠色ねずみに覆い隠されていて、太陽は顔を出してくれない。ペラペラのTシャツ一枚に、気まぐれに母親が捨てていったサイズも合わない上着を羽織っただけの姿では指先も足も凍えてしまっただけ、お腹の底まで氷を詰め込まれたような思いで。動けない、と思っってしまったから、もう駄目だったのだ。

ねえ、と三度、呼びかけられて。そろそろと、私は顔を上げる。近所の中学校の制服、だから、六つ以上も上の人。背が高く、鼻筋が通っていて、唇が薄くて、ちよつとだけ鋭い眼差し、やたらと、顔が綺麗なお姉さん。セーラー服だったから、まず、間違いはないのだけれど、中性的な顔立ち、という言葉が昔の私は知らなかったから、男の人のように綺麗な、と思ったのを覚えている。

私を見つめる瞳は、私が写り込んでいる瞳は、空の色にも似た鼠色。どうにも珍しいそれをぼうっと見つめ上げていたならば、大丈夫、とまた、繰り返して問いかけられた。細く白い指先が髪の毛をかき分けて額に当てられて、その冷たさに、私は目を細める。

「君、おうちは？」

「……団地の、三ばん」

折角気持ち良かったというのに、彼女の手はすぐに額から離れていった。そうかと思えば問いかけられて、そう、分かっ

たよ、と言われてすぐ、彼女が私のランドセルを取り上げていく。団地の上の上の階の人がくれた、お下がりの、ボロボロになってしまった、けれど可愛い赤色のそれ。思えば中身もないに等しいそれをリュックの上に重ねて担いで、行こうか、と彼女はしやがみこんで私に向かって両手を広げた。

「……なあに」

「おんぶの方が、いい？」

それは何、と聞いたはずなのに、彼女は困ったな、という表情を浮かべた。なまじ顔が整っているものだから、まともな美術感性なんて養っていなかった私でも、ああ、人が好きになるのはこういう人なのだろう、と思えるようなそんな光景に、ふふ、と場違いにも笑ってしまった。多分、腕が通らないと思うんだ、とランドセルを前に抱えようとして失敗した彼女は、やっぱり、と言ってまた、両手を私に向かって差し出す。

「抱き上げるよ。こんなところに居たら、もっとひどくなる」

そこまで言われてようやく、それは、私を正面から抱え上げるために伸ばされた手なのだ、と気付かされた。だって、全然、抱っこだなんて。昔むかしはしてもらったのかもしれないけれど、思い出せる記憶にそれはない。ごめんね、触るからね、と丁寧すぎるくらいに断りを入れた彼女は、私の脇の下から腕を通して、えい、と私を抱き上げた。

人の、他人の体温は、私よりもずっと、ずっと、冷たくて。けれど、不思議と温かい。

「腕、首に回して。しつかり、しがみついでくれ」

そう言われて、おず、と腕を彼女の首へと伸ばす。長い髪を後ろでまとめた、彼女のしつぽが手に触れるのをかき分けながら、自分の手と手を繋いで輪っかを作った。足も、しがみついでね、と言われて、その通りに。べたりと全身で引く付くようなその姿勢は、向かい合わせになった彼女の心臓から、自分とは違う鼓動のリズムを伝えてくれる。セーラー服の下の細い身体が、私の骨ばったそれとは違うのだということを教えてくれる。

「ありが、とう」

三番棟で合っているかな、と歩き始めた彼女の耳元に、教えてもらった、大事な、大事な、言葉をひとつ。がらがらで、掠れていて、伝わっただろうか、と不安になったけれど。

「どういたしまして。……こちらこそ、頼ってくれて、ありがとう」

そうして言葉が返されたのに、思いもしない形で自分に「ありがとう」が寄越されたのに、ぐるぐるとうなされる頭で、あはは、と胸が温かくなつたのを吐き出すように笑っていけば。多分、この温かいのは、うれしい、と呼ぶんだと。授業で習ったばかりのその言葉が、自分の中で見つけられた気が

して。

ちゃんと人間だったんだなあ、なんて。その日、初めて、私はそうと自覚できたのだ。

…

ふえ、ほぎやあ、と甲高い泣き声が聞こえてきたのに、びたり、と足を止めた。ベビーカーの中から響いてくる声に、あらら、と女性——母親はおくるみに包まれた赤ん坊を抱き上げる。

「なきむし！」

そう、姉、だろうか。まだ未就学児だろう少女がくすくすと笑っているのを、母親は柔くなだめながら、どうしたの、と腕の中でゆするようにして赤子をあやし始めた。少女は暇を持って余したのか、歩道の隅で、さっきまで押していたベビーカーの足元にしやがみこんでいる。

別に、幸せそうな家庭が羨ましいだなんて感情は、とうの昔に置いてきてしまった。今更、どうにかなるものでもないし、羨んで、妬んで、それで私に何か得があるわけでもない。

ただ、何となく、泣きたくなるだけ。

仕方がないのだ、弱いものだから、どうにも強くは育てなかったものだから。やっぱり人の善性など心の底から信じき

れるものではなくて、大きくなるほど感じられる機会も余計に少なくなっていく。世界は誰も助けてくれない、思い出ばかりが助けてくれる。そう思い込んでいることだけが、私にとって、幸せだと思える時間だったから。

水色の、快晴の日の空の色をしたおくるみに包まれた赤ん坊は、まだ元気に泣いている。大変だ、きつと、子育ては大変なのだ。そうじゃなければ、恋人の世話は四六時中したがってべったり引っついて離れないあの母親が、そう簡単に面倒がるはずもないのだから。

私に、出来るだろうか。思い浮かんだのはそんな問い。それも、子どもなんて産めるのだろうか。肉がつかなかった身体はみすぼらしく、何故だか人並みには伸びた身長とはアンバランス。小四の保健の授業で習った月経は未だ来ていなくて、少し遅いかもしれない、と思い始めたぐらい。

それに、色づき始めた同級生たちとは違って、好きな男の子だなんて出来た試しがなかった。拳を振り上げられないように必死で、許されるなら近付きたくなくて。誰それがカッコいい、だとか、それはどこから湧く感情なのだろうか。それはどうやって胸を締め付けるのか、それはどうやって心臓を苦しめるのか。誰も教えてくれないし、本にも書かれていないのだ。

あああ、ああん、と泣き続けている赤ん坊を見つめていた

ら、ぱちり、と母親と目が合った。怒られる、と思つてランドセルの肩ひもを握りしめて走り去ろうとしたなら、待つて、と呼び止められる。

ざり、と履きつぶした靴の底がアスファルトと擦れあつて悲鳴を上げていた。急ブレーキをかけた身体はすっ飛んでいきそうになつて、ゆっくりと振り返ったなら、母親は——多分、皆の理想なのだろう優しい笑顔を浮かべた柔らかな女性は、おいで、と私を手招きして呼び寄せる。

ゆっくりと膝を折つて私に視線を合わせてから、どうしたの、と聞かれて。どうしたも、こうしたも、ただ、幸せそうでいいなあつて、このまま幸せでいて欲しいなあ、つて。ただ、願うふりをして、自分の寂しさを慰めていただけなんです、なんて。

「抱っこする？」

気付けば、赤ん坊は泣き止んでいて、くりくりとした琥珀色のまあるい瞳を私の方へと向けていた。ほうら、と母親が私の方へとそれを差し出してくるのに、危ない、とか、こんな私に抱かせて怪我でもしたら、とか。言いたいことはいっぱいあるのに、そんな戸惑う心とは裏腹に、身体はゆっくりと腕を伸ばす。

重いから、と言われて受け取った、その、温かさは。ぽかぽかとした陽気の中に日光浴をしていたからと、それだけで

はなく。さつきまで、母親の腕にいたからと、それだけではなく。この、小さな、身体が。小さな心臓を動かして、懸命に生きている、いのちの温かさ。

「翔って言うの。空を翔ける、って書いて」

ああ、私なんか、願わなくても。この子は、きっと両親から貰った祈りを抱いて、幸せになるのだろうにと思わせるには十分な、そんな優しい声の色。

「あなたの、名前は？」

見つめる瞳は、赤ん坊と同じ、琥珀色。おんなじだ、とそこに映る自分の顔を見つめながら、ぽつり、と与えられたその名を伝えたのなら。

「わたしと似てる！」

と、そう、少女は何故だかそれだけで嬉しそうに私に笑いかけてくれた。お揃いじゃなくて良かった、と思つたのは、口には出さなかつたけれど。大事に抱きかかえた赤ん坊を母親に返したのなら、素敵な名前ね、と彼女はそう言った。

「きっと、毎日。あなたのことを思い出せるようになって、そんな名前なのね」

ふわり、微笑まれて。

そんなわけがないのに。そんな素敵な母親じゃないのに。

そうかな、そうなのかなあ、そうだといいなあ、って。どうせホントが分からないなら、思い込んだってばちは当たらず

ないでしょう、って、誰にともなく願うのだ。

:::

そのお店のことは、ずっと昔から知っていた。団地の傍にあつて、近所の子どもたちがそろばん塾の帰りなんか小銭を握りしめていく駄菓子屋だ。いつも小さな子どもの姿でこつた返しているそこに入っていく勇氣なんて持てやしなくて、きつと、自分には無縁な場所だと思ひ込んで。

ふ、と、足が向いたのは偶然だったのだ。お盆も最中、幽霊部員になりきれなかった美術部の活動の帰り道。先生の手伝いをしていたのなら空はすっかり赤く染まり上がっていて、燃えているみたいだ、と思つた。

そうして、通りがかつた駄菓子屋の中には、いつもはいるはずの人影がひとつもない。赤とんぼが聞こえたのはもう随分前だったから、多分、門限を過ぎた子どもたちは家へと帰っていったのだろう。

今なら、いいだろうか。行きたかつたそこに、足を踏み入れたって。そんな甘い囁きが自分の脳内に表れて、お金もないのに、と止める理性は一瞬で切り伏せられた。好奇心には、勝てなかつたのだ。

ガラガラ、と硝子扉を引けば、思ったよりも大きい音が立

つ。それに、店番らしい小学生の子どもが顔を上げて、ぱち、と瞬いたのを視界の端にやりながら、ぐるり、店内を見回した。飴玉、チョコに、キャラメル、スナック菓子。そんな種々とりどりのお菓子どころか、エアガンやプラモデルなんかも置いてある不可思議な店内を、好奇心の惹かれるまま歩いて回る。甘い香り、しょっぱい香り、それらが入り混じった、私の知らない小さな世界。

思わずお菓子を手にとっては、買えもしないのに、とすぐに戻した。ぐるっと店内を見終わって、すごい、と感嘆したのなら、土間の上がりに腰掛けた子どもとぼちりと目が合ってしまった、あ、と思う間もなく、取り繕うように笑んでいた。

冷やかしだと言うのに長居しすぎだろうか。怒られるのか、と思つて羽織った学ランを――借り物のそれを思わず握りしめる。皺しわが寄つたらそれこそあの子は怒るだろうか、と現実逃避にも似た想起をしていたのなら、子どもはばたばたと立ち上がり、私の前へとずいど右手を差し出した。

白いこの糸の先についた、赤い飴玉。これは、と思つて子どもを見つめても、無表情のまま手を突き出されるばかりであるのに、受け取ればいいのだろうか、と両手で器を作つて差し出した。そうすれば、ころりと落とされたその塊に、私は何度も視線を歩き来させて、どうしたらいいのだろうか、

と戸惑うにつれ、その優しさのキャパシティ越えに溺れかけていた。食べてみてください、と言われて、それで。

いただきます、と小さな声で呟いてから、恐る恐る、飴玉を口へと運んだ。だって、目の前にそれを吊るされたなら、惹かれずにはいられないだろう。ぱくり、食んだ瞬間身体中に歓喜が巡るようにぱちぱちと視界が弾けたのに、思わず、笑みがこぼれた。

あまい、おいしい――知らなかった、幸の味。

甘さが解けて唾液に混じったものを、一緒に呑み下す。ああ、しあわせだ、なんて。こんな、子どもが買えるそれ一粒で、人生全てが賄えた気になって。大袈裟だなあつて笑われたって、だって、本当に。

人に与えられたその幸福に、私は、もう、満たされたように思えてしまった。

「――明日も、明後日も、また、いつでも、ずっと」

そう、呆けていたのなら。子どもは拳を握りしめながら、踵を浮かせて、そう私に呼びかけていた。

「ぼくは、あなたを、待っています」

ここで、絶対に。なんて、続きそうなそれは。

まるで、告白のようだ、と頭の中で浮かれた誰かが笑つていたけれど。そんな馬鹿なことがあるわけない、といつも通りの自分がすぐにその頬を叩いてしまう。

唐突すぎるぐらいの言葉。どこから出てきたのかも知らない言葉。そも、だって、私はこの子に初めて会った。

信じてはいけけないでしょう、信じては馬鹿を見るのでしよう。だって、だって。こんな、恵まれて、与えられて、そんな過剰すぎる施しに、私の心はもうとつくに悲鳴を上げているのに。自分よりも小さな子どもに、そうも私などを救わせてしまつては可哀そうであるのに。

それなのに。私は、満たしてくれたこの子のことを。うまく憎むことさえ出来なくて。

——また、いつでも、ずっと。

子どもが言ったことを、舌の上で転がして。ぐっと苦しくなった胸を押さえて、いつそ逃げてしまえばいいのか、と思つて。

ああ、けれど。また、と言われたのは、何時ぶりか、だなんて知らない思考が頭を占めた。もしかしたら、一度だつて言われたことがなかったかもしれない、と思わされて。

「……これは、何の味？」

はぐらかしたかったのか、思い浮かんだ嫌な思い出を忘れてしまいたかったのか。そう、とにかく問いかけた私に、子どもは瞳を輝かせながら、いちこの味です、と答えてくれた。

他の果物よりも甘くて、蕩けるように幸せになるんですよ。頬を上気させて答えてくれる姿を見ると、いつかの、無

知だった——今でも十分そうではあるが——私のことが思い出された。

今ではこんなにも、馬鹿みたいにあれやこれやと考えてしまふせいか。空っぽだった頃の話は、どうにも、思い出せなくなつてしまつていただけ。

::

理由なんて、殆どなくて。寒いから、とか、着てみたかったから、とか、虎の威の様に安心するから、だとか。あるいは、人に我儘わがままを言つてみたかったのだ、とか。

そんな理由は何も伝えずに、ただ、学ランを貸して、と言つた、そんなお願いを聞いてくれた彼のことを。私は、変な人と思いはしたけれど、別段、好きも、カッコいいも、私の胸には現れてはいなかった。

だって、彼が私の手を握る時、私の心臓はいつもの三倍も早鐘をうつけれど。だって、ご飯、一緒に食べない？と誘いかける彼の声に、私の胸は砂を食わされたような苦しさを覚えるけれど。好きとはもつと甘いものだろう、カッコいいとはもつと軽薄な言葉だろう。だったら、これは、何なのだろう。いいえ、問いかけたって、答えは誰もくれないのだけだ。

鍵が壊れた中学校の屋上は、いつも生徒たちの隠れたたまり場の様になっていた。けれどそれも、授業があるような昼の時間帯ばかりで、放課後の鐘が鳴り終わって部活動の時間にもなれば、いつもそこにいるのは私と、彼——倫の二人きり。

倫は、私とは違って、どうにも夢見がちな男の子だ。子どもは娘と息子と二人欲しくて、そのために大学を卒業する頃には結婚して、ゆくゆくは皆でピクニックに行つて屋外で美味しいご飯を食べたいなあ、とか、そんなことを。叶うに決まっているって、僕は幸せになりたいんだって、疑いもなく話すのだ。

「大学に行けるのね」

「え、だって、ちゃんと勉強はしているよ」

苦手な数学だつてきちんと、平均点はとっているから、と。そう話す声色は、どうにも生命力がないだとか、覇気がないだとか言われがちなものだけれど、私にとつては心地好い。だって、どうにも、私を叱る厳しい声とは似ても似つかないものだから。

「男の子が、二人生まれたら？」

「それは、それで。賑やかなのも、悪くないんじゃないかな」

一緒にキャッチボールをしたりさ、と言うけれど、彼は体育はあまり得意じゃないはずだ。大人しそうな見た目通り、

大人しい彼が、子どもが生まれたからといってそうもはしゃげるものなのだろうか。

「君はどう思う？」

さあ、どうだろう。出来れば見届けてみたい、なんて、思いもしたけれど。

「そう、ね」

少し想像しづらくはある彼の未来が、実現さえしてくればそれで、とエゴの苦さを呑み込んで。

「……とても、楽しそう」

そう、答えるために、カラカラの喉から、無理矢理に言葉を引き剥がすのだ。

倫ならきつと、しあわせになるだろう、つて。しあわせな家族を作るだろう、つて。思つて、伸びた前髪が目にかかつてしまったふりをして、一度強く<sup>まぶた</sup>瞼を擦った。

私のこの、途切れ途切れの記憶の中で、しあわせになって欲しいと願った人は少ないものだ。

私に、両親を嫌える居場所をくれたお兄さん。

私に、感じる心をくれたお姉さん。

私に、陽の落ちる赤色の美しさを教えてくれたお母さん。

私に、一生分の幸せをくれた店番の女の子。

そうして、私に、想像もつかない夢を一緒に見させてくれ

た、最初で最後の一人の友達。

何時だか、図書館で読んだ小説の、結婚式のことを思い出す。小さなチャペルで、新郎と、新婦それぞれの家族や友人が左右に分かれて座って、入場する二人に祝福の花びらを投げかけていた。ああ、出来たなら、そんな未来があったなら。私の側の席には、どうか、今も顔を思い出すあの人たちに座っていて欲しいなあ、なんて、そんなこと。

「誰に祈れば、いいのかな」

神様か、仏様か、それともあれか、お天道様か。さあね、と口の中で転がしたなら、下校を促す鐘ががらんがらんと鼓膜を揺らした。

それと同時に、防災無線から、赤とんぼが流れ出す。夕焼け小焼けの空の色は、全てを燃やす、あかいいろ。音楽の授業で習った旋律を口ずさんだなら、倫も加わるように同じ歌詞を謳って、連ねて。

——それは、晩秋の、寒い日のこと。倫の学ランを羽織ったまま屋上で空を仰いだならば、真っ赤なアキアカネが一匹、ふわりと私の上を舞っていた。

指を伸ばせば、逃げられて。縋るように駆けて追いかけた先、柵の向こうへと消えていくのを、跳んで、また、次の一步を次ぐようにと足を踏み出した。

何も無い空の上、なんて私に歩けるはずもないのだけれど。

「っふふ、あはは！」

風が私を掬い上げて、髪が散って、けれども、彼から貰った学ランだけは離さぬように握りしめて。ほんの一瞬、視界の端の、振り返った先の彼に、ばいばい、と手を振った。

人生で一番、大きな口を開けて、腹を抱えて笑って。

白いドレスは着れないし、綺麗なヴェールも被れないけれど。この、黒い服で十分だ。祝福されなかった私には、これで、余るぐらいの幸せなのだから。

暮れ六つの、日没時に。世界が、赤く、燃えている。夕陽が地平に落ちていく、ほんの一瞬のこの時間を。世界は、祝ってくれるだろうか。毎日、毎日、雲の向こうにあったとしても、ずっと繰り返されるその眩さを。

そんな答えを知ることではなく、誓いのキスも知らないままに。

私は人生五回目の、そうして十五歳の誕生日を祝う口づけを、還る大地へと贈るのだ。

——ああ、ありがとうって、言い忘れたなあ、なんて。後悔するのは、もう遅い。

……ええ、きっと、忘れようもなく。  
私はずっと、覚えていてでしょう。

霜月の、寒い夕方のことでした。  
私が、茜が、生まれたのは。